
Happening Days

nora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H a p p e n i n g D a y s

【Nコード】

N 1 1 0 9 Z

【作者名】

n o r a

【あらすじ】

主人公は大瀬良 錬へおおぜら れんへ。

風雲へふうつんへ高校に通う高校一年生。

能力者の存在する世界。

そんな中、無能力者である錬は特活部の勧誘を受ける。

プロローグ

そこはまさにこの世の地獄だった。

建物は崩れ落ち、その周りには夥しい数の死体だった。

地面は死体から流れる血で赤く染まり、銃声や叫び声が絶え間なく聞こえてくる。

そんな地獄の中に小さな少年が、建物の陰にうずくまっていた。

小さな少年は泣きながら、

「お父さん、お母さんどこお」

と呟いていた。

しかしその声は誰にも届くことなく、銃声や叫び声にかき消された。

小さな少年は寂しくなってしまう、大声で泣き始めた。

すると足音がこちらに向かって聞こえてきた。

小さな少年は泣くのを止め少し笑顔になった。

だがすぐに恐怖で顔が引き攣ってしまう。

第一話 夢才チ

ブルルルルル！・・・ブルルルルル！・・・

「zzzz・・・イヤだッ！！」

俺は起きるのと共に勢いよく布団を吹っ飛ばした

（って夢か。なんか久しぶりにいやな夢みたぜ。誰だか知らないけど電話してきたや奴に感謝しないと・・・って携帯鳴ってるからでねーと・・・）

そして俺は携帯の通話ボタンを押した

「もしもs」出んの遅せーよ！！携帯鳴ってたらすぐ出やがりやがねー！！」

キーン！

（うっせー！鼓膜破れるじゃねーか！）

「大声で電話してくんじゃねーよ！秀司！今起きたばっかなんだよ！！」

今電話をしてる相手、親友の大宮秀司「おおみや しゅうじゅ」に文句を言い返した

「今起きたつて・・・おまえ学校遅刻するぞ・・・」

（はぁ！遅刻つて今何時・・・つてもうこんな時間！）

時計はいつも起きる時間より大幅に進んでいた。

（やつべー！ホントに遅刻するー！）

「じゃあ俺っちは遅刻したくないから先行ってるぞ〜」

「っちょ！待ておm「ツーツー・・・」

「遅刻するー！！！」

「おまえ、親友、置いてく、とか、マジで、ヒデーな。」

と全力で走ってきて息が切れながら俺は親友の秀司に文句を言った。

そう、あの後すべてを五分で済ませて追いついたのだ。

（我ながらなんて早さだ）

とか思っている

「お前が寝坊するから悪いんだろー。電話で起こしてあげただけでも感謝してほしいくらいだぜい」

と言い返してきた。それを言われると言い返せなくなってしまう。

「そーだけだよー。」

「まーお前が寝坊すんのも珍しいんだけどな。徹夜で肌色多めのゲムもしてたのかあ」

「お前と一緒にすんな！ってゆーか俺ん家にある18禁の本やゲムもって帰れよ！」

「そしたら姉貴に捨てられるからヤツダねー」

「デメエ・・・」

などとたわいもない言い争いをしていると、バン！と背中を叩かれた。不意討ちとあまりの強さに

「ぐえっ！！」

などと気持ち悪い声をだしてしまった。

「おはよーっす」

「おはよう。紫苑ちゃん」

「紫苑てめーいきなり人様の背中叩いてんじゃねーぞ」

今背中を叩いてきたのは幼馴染の黄川田紫苑（きかわだ しおん）
と言っ女の子だ。

「錬が家来ないから悪いんでしょー。錬昨日、新約とある魔書の録を今日の朝、借りに来るっていったじゃない。」

「あっ！悪い朝寝坊したからすっかり忘れてた。」

「へー錬が寝坊なんて珍しいねー。」

(俺が寝坊すんのがそんなに珍しいか)

おっと、そういえば自己紹介が遅れたな。

俺の名前は大瀬良 錬へおおぜら れんへ。

風雲へふううんへ 高校に通う高校一年生だ。

以上自己紹介終わり。

「そういえば秀司が錬と登校するの久しぶりだね。彼女迎え行かなくていいの?」

と紫苑は秀司に尋ねた。そう秀司は中学の卒業式の日から付き合ってる子がいるのだ。

(そういえばひさしぶりだなー)

と思っていたら、いきなり秀司の雰囲気が悪くなって

「昨日別れた。」

とか言い出した。それを聞いた瞬間、俺は

(ああ、またかあ。これで別れた女子14人目だな。)

などと考えていた。秀司はカッコいいから彼女が出来るんだけど長く続いたことがない。

隣で紫苑も、（またか。）みたいな顔をしている。そしたら

「待つて、二人とも。なんで（ああ、またか。）みたいな顔してんの!?!」

「だって秀司がこれで別れた女の子14人だよ。どんだけ別れてるの?」

「だって紫苑ちゃん仕方ないじゃん!向こうがいきなり（私たち別れよ。）って言うてきたんだよ!理由を聞いたら（疲れた。）だって信じられますかい!?!」

「お前は彼女に色々求め過ぎなんだよ。もうちょっと相手の気持ち考えてやれよ。」

「だってさー……ぐだぐだ言わない!過ぎたことだろっ!」

「はい……（泣）」

秀司を叱った?後、俺たちは学校に着くまで色々話していた。

そして、学校の近くの路地裏でいきなり

「なあなあ俺たちと遊ぼうぜー」

などという声が聞こえてきた。

第二話 禁句

「なあ、良いだろ。学校で勉強するよりずっと楽しいぜ。」

（おいおい。いつの時代のナンパだよ。）

とか思いながら声がするほうを見ると、路地裏にちゃらちゃらした男3人が赤いフードをした女の子を囲んでいた。

（これは助けるべきかな？ってゆーかあの女の子えらい堂々としてるな。ちっちゃいけど。）

と思っていたら秀司が

「ここは俺っちに任せてくれい。」

とか言ってきた。

「おいおい大丈夫か？無理しないほうが良いぞ。」

「そーだね。秀司はあんまり強くないから無理しないほうが良いよ。」

「し、紫苑ちゃんはストレートに言うね（汗）でも俺はハ能力者だから大丈夫。」

そう、この世界には能力なんてものがある。

けれどみんなが能力を持つてるわけでもなく、だいたい100人が150人に一人しか持っていない。

そして能力者にもランクがあり、AからFまでの六段階まである。

ちなみに秀司の能力は速度変化ハスピードアップで、ランクはDである。

「まあ、そんなに強くは見えないしな。あいつら

「すぐに終わらせるから、手えだすなよ。」

とか話していたら向こうもこちらに気づいたらしく

「なんだあ！見せもんじゃねーぞ！」

「どっか消えろ、ガキ共！」

「おいつ！あの子可愛くね!？」

などと言いながら、こちらに近づいてきた。こんどは紫苑にナンパする気らしい。

「ねえねえ、そのその左右に髪を結んでる女の子、俺たちと遊ぼうぜ」

「そうだよ。そんな女みたいな野郎といるよりは、楽しいよー。」

ブチッ！！と俺の何かが切れた。

「「あっ！」「」

「なあ秀司、あいつらは俺が狩って良いか？良いよな！？」

「お、おう。（あーあ。あいつら禁句言っちゃったよ。）」

「わ、私たちは先に学校行ってるね。（ここにいたら、巻き添えが来そう）」

「おう。すぐに終わりそうにないからな。」

と言って二人は言ってしまった。まあそんなことよりあいつらどうやって狩ろう？

「おいおい俺たちの邪魔すんなよ。ガキはどっか行け」

と相手の一人が手をパタパタさせながら「しっし！」と言ってきた。

「うっせーよ。この時代遅れのナンパ野郎共。気持ち悪い顔しやがって。その鼻のピアスは牛の証ですか。」

「なんだと！このガキ図に乗りやがって！」

と鼻にピアスをしてる男が突っ込んできた。そして殴りかかってきた。

「図に乗ってんのは、テメーらだろーがあ！」

俺は男のパンチに合わせてカウンターを顔に当てた。

男はそのまま1、2mくらい飛んでった。

「テメー、ぶっ殺してやる！」

今度はサバイバルナイフを持って違う男が走ってきた。

そして俺に向かってナイフを振ってきた。

だが俺はナイフを振ってきた手をよけずに振ってきた腕をつかんだ。

「こんなもん降ってきても当たるかよ！」

そして腕を思い切り握りナイフを落とさせた。

「イテテテテッ！」

「だーれーが、男女だー！！！」

男にボディーブローをした後に、顔に回し蹴りをお見舞いした。

男は壁に顔を打ちつけ、その場に倒れた。

「残りはあんただけだぜ。逃がしやしないから覚悟しろよ。」

と俺は言い男に近づいた。

「俺をこいつらと一緒にするなよガキ。」

と男がが言つと手のひらに、限りなく透明な玉が出来上がった。

「へーあんた能力者か。」

「これは空気球♡エアボール♡って言う能力だ。どうだビビるか。」

「はっ！その程度でビビるかよ。あんたどーセラシクFかEだろ？」

「くっ！そこまで言うならこれ喰らってから言うんだな！」

（凶星かよ。）

男は手に作った玉を投げてきた。

（避けるのめんどくせーな）

そう思ったので俺は空気の玉を手のひらを合わせて叩き潰した。

パンツ！！となって空気の玉は消えた。

「俺の空気球♡エアボール♡が！」

「こんなの喰らうかよ！今度はこっちからいくぜ」

俺は男の近くまで近づいて、アッパーの構えに入った。

「このロリコン野郎がー！」

「ひーー！」

そして拳を思い切り振り上げた。

男は宙に浮き、思い切り背中から地面に落ちた。

その後、俺はまだ気がすまなかったので二度と言わないように脅した。

男たちは、脅したらすごい速さで逃げ出してしまった。

「弱かったなあ、あいつら。もう少し出来ると思ったのになあ。」

俺はふと女の子がいたのを思い出した。

(そっぴあの子はもう逃げたかな?)

と思ったが女の子はまだここにいた。

しかもなんかすごい殺気を出していた。

それが自分に向けられていた。

（なんで助けたのにこんな殺気向けられるの！？普通はここお礼とか言う場面だよね？）

なんて考えていたら、フードの中から唯一見える口が動きだした。

「ねえ、君。」

「あ、はい。」

「なに人の獲物横取りしてるのかな？」

「はい？」

（横取りって俺助けたただけなんだけど・・・まあ理由は女男って言われたからだけ。）

「それにあたしのこと馬鹿にして・・・」

「へ？ば、馬鹿になんていつしたんですか？俺。」

「さっきあなたはあたしのこと子供って言ったでしょーが！」

「いや、言ってねーよー！」

（なんだこの女の子！？被害妄想激しいだろ！）

「さっきあいつらにロリコンって言ったじゃない！ロリコンって小さい子好きな奴らのことでしょー！つまりあなたはわたしを子供扱い

した!！」

「なんだそりゃ!結局俺は小さいなんて言ってるじゃん。」

「ふざけんなー!人の獲物として小さい呼ばわりした拳句、しらはつくれるな!」

(えー!?事実ですけど!)

とか思っていたら女の子は堪忍袋が切れたらしく

「もー怒った」

(すでに怒ってるけどな・・・)

「後輩の癖に生意気言って・・・燃やしてその根性叩きなおしてやる!！」

(この子が先輩?)

よく服を見るとなんと風雲高校の制服をきてた。

余談だが風雲高校の制服は、白いブレザーに黒のズボンで学年ごとにネクタイやリボンの色が違う。

今年は一年生が青、二年生が赤、三年生が黄色なのだ。

そしてあの女の子のリボンも赤、つまり二年生というわけだ。

(こんなちっちゃい子が先輩！ってゆーか燃やすって!?)

そう思った時、女の子の周りから火があがった。

「見ての通りあたしは能力者。ちなみに能力の名前は炎ハフレア。その名の通り火を扱うの。」

「まてまて・・・じゃなかった。待ってください先輩！タメ語や獲物を横取りしたの謝りますから！」

「イヤだね とりあえず怒りをぶつけなきゃ気が済まないし。なにより子ども扱いが許せない！」

(えー!?ほとんど八つ当たりじゃん!)

「まあとりあえず・・・燃えろー！」

と言い、火の玉を放ってきた。

こちらも半ばヤケクソ気味になり

「あーもー!いいぜやってやるっじゃねーか!」

と言い先輩との喧嘩が始まってしまった。

第三話 火の妖精

俺はまず相手の放ってきた火の玉をかわした。

「へー、結構やるじゃない。ならこれはどう！」

フードの先輩「次からはフード先輩」は今度は、複数の火の玉を作りこちらに放ってきた。

（おいおいマジかよ！）

とりあえずこんな狭い路地裏じゃ避け切れそうにない。

どうしようか考えていたら、近くに大きなゴミ箱があった。

（これならっ！）

俺はそのゴミ箱を一番多く火の玉が飛んできたところに蹴り上げた。

思った通り火の玉は蹴り上げたゴミ箱に当たって消えた。

ゴミ箱は燃えてしまったが……。

（今のうちに！）

そしてゴミ箱を蹴った方へと走って行き相手に近ずいた。

こちらは何も持ってないので近づいて攻撃するしかないからだ。

「あんた戦い慣れてるわね？今は普通とっさに出来る芸当じゃないわ。」

「お褒めの言葉ども。」

「でもあたしに近づいたのは不正解！」

なんとこんどは自分の前に火の壁を作り上げたのだ。

「どう？まーファイヤーウォールってとこかしら？」

「こんなものってことないさ。」

俺は両手を顔や頭の前でクロスさせて火の壁へ飛び込んだ。

そして服についた火を消すように地面に転がりながら着地した。

「な！じゃあこれなら」

なんとフード先輩は手に剣のようなものを持っていた。

（あんなん喰らったら死んじまうぞオイ！）

「喰らえ！ファイヤーウィップ！」

なんと手に持っているのは、剣ではなくムチだった。

しかもすぐくムチの動きが速いから近づけない。

「くそ！」

「さっきまでの勢いはどうしたの！」

今度は相手が近づいてきた。

（あのムチは火で出来てるからつかむ事ができねえ！かといって後ろは火の壁だ！）

まさに逃げ場など無く、絶体絶命な状況にある。

「もうここまでね。じゃああたしのストレス発散を手伝ってもらわよー！」

（びびすねばいいー？？びびすねば・・・！）

「安心しなよ。そんなに痛くないように燃やしてあげるから。」

(そうか！まだ手はある！)

「まだ終わってないぜ先輩！」

「負け惜しみ？男の癖に見苦しいわね。」

「これならどうだ！？」

と言い足元の小石を拾いそれを投げつけた。

だがフード先輩は火のムチでそれを止めようとした。

だが・・・

「なっ！」

投げた小石は火のムチを通り抜けて焼け石状態で飛んできた

すかさず体を軽くひねり小石を避けた。

「やっぱりそのぐらいの火じゃすぐには石が燃えないようだな。」

俺はその隙にフード先輩の目の前まで近寄った。

「くっ！でもその距離じゃあたしのファイヤーウィップは避けられないわよ。」

「避けられないなら止めればいい。」

「どうやってあんたにはさわれない火のムチを止めるのよ!？」

「火のムチは無理でもあんたの手は止められる!」

俺は火のムチを振るおうとした瞬間に右手を左手で抑えた。

「もらったー!ー!」

俺は右手を大きく振り上げて殴りかかった。

「まだまだあ!ー!」

とフード先輩が言った時、火のムチは形をグネグネした槍に変わり俺に襲い掛かってきた。

(やばいけどタッチの差で俺の方がわずかに速い。これなら殴って攻撃を止められる！)

「うおおおー！ー！ー！」

「はああー！ー！ー！」

互いに叫ぶ。

そしてパンチがフード先輩に当たる瞬間

ドカツ！

という壁を殴ったような音が殴った方向から聞こえた。

(なんだこれ！？)

なんと殴った先にあちらが透けて見える薄い水色の壁があった。

（おかしい！この人の能力は炎フレアのはず。こんなもの出せないはずだ！？）

ふとフード先輩の顔を見ると、とても驚いた顔をしていたがすぐに怒ったような顔つきになった。

さらにフード先輩の攻撃も同じものに遮られていた。

つまりどちらの攻撃もこの壁らしき物のせいで当たらなかったわけだ。

（どうゆうことだ？この近くに他の能力者がいるってことか？）

だが周りを見回しても誰もいない。

と言つかさつきフード先輩の出した火の壁のせいで、入れないはずだ。

（まさか視覚操作系の能力者か！？いやでもそうだとするとこの壁みたいなものの説明がつかない・・・）

あれこれ考えていると

「部長！いるんだったら出てきてくださいよ！」

とかフード先輩が言い出した。

「ずっといますよ。あなた達の上に。」

その声を聞いて俺は上を見上げた。

そこにはなんと人が浮いていた！

（いや違う。自分の足元にさっきの壁みたいなのがある。）

その人は女性で髪の色は濃い茶色で長い髪をなびかせていた。

顔は大人っぽく、なんと言うか優しそうで綺麗な人だった。

驚いたのはその女性も風雲高校の制服を着ていたことだ。

リボンは黄色、つまり最上級の三年生だ。

そしてなにより

（くそー！向かい風のせいでスカートの中が見えない！これが噂の

「鉄のカーテン」か！？）

などと落ち込んでいたら

「物が燃える匂いがしたからまさかと思い、きてみれば……。」

「部長！人の私情に首を突っ込まないでくださいよ。」

「あのまま戦っていたらそちらの彼は大怪我を負ったでしょう。そ

れになんで一般人に対して能力を使っているのですか？」

「それはそいつがあたしの獲物をと、まあ、大方その後には小さいやらなんやら言われて能力を使っただけでしょうね。」

「うぐっ！」

（おお！大体合ってる。すげーあの部長とか言う先輩、あのフード先輩を押してるよ）

「でも・・・言い訳は聞きません。とりあえず学校行ったら反省文です」

「えー！」

「ですから学校へ行きますよ。」

「ハイ・・・」

すぐくダルそうなフード先輩をよそに三年の先輩こちらに降りてきた。

だがやはり鉄のスカートは破れなかった。

「この度は本当にすみませんでした・・・」

「いやいや！こっちにも非はあるんだし、おあいこですよ！」

「まあ！お優しい人ですね。」

すごく綺麗な笑顔でおもわず「ドキッ！」っとしてしまった。

「えっ！いや普通ですよ。」

「ありがとうございます では私はこの辺で。急がないと遅刻ですよ。大瀬 錬さん。」

と言い行ってしまった。

（ん？なんで俺の名前してんだ・・・？）

「って遅刻って今何時!？」

携帯で確認すると

「授業まであと2分!！」

そして周りを見るといつの間にかフード先輩までいなかった。

「遅刻するー!!!」

となんか朝と同じ台詞を言いながら全速力で学校まで走った。

第四話 能力

「助かった・・・」

「遅刻したけど今日の授業が能力判定でよかったね。」

いきなりだがはっきり言おう。

俺はやっぱり2分で着くわけもなく、遅刻した。

けれど今日の授業が一日丸々使った能力判定だったので、特に注意されることなくすぐに解放された。

ちなみに今は移動中で、紫苑と秀司と話をしている。

「けど錬があんな奴らに時間喰うなんて、あいつら強かったのかあ。」

「ちげーよ秀司。あいつらはすぐに潰したけど、突然ナンパされてた子がブチ切れてさ・・・」

「なんでえ?」

「さあ・・・」

「きつと何か失礼な事言ったんだよ。錬はそーゆーの疎いから。」

「ちげーよ紫苑！」

「どーだか〜。」

などと朝の出来事を話し合っていた。

（ホントなんだったんだろ。あの人達？）

「じゃあ俺は校庭行くからこの辺でえ。」

「おう、また後とで。」

「がんばってね。」

「ありがとう 紫苑ちゃん。」

秀司は身体能力向上系の能力者なので、校庭に行った。

「じゃあ、私も音楽室行くから。」

「おう、がんばれよ。」

「うん」

「けど紫苑の能力ってすごいよな。安心音源（リラックスソング）
だっけ？」

「そつだよ！なんで疑問系なの！？」

「悪い悪い。」

「もう・・・。」

説明すると、紫苑の能力はぶっちゃけ歌うことだ。

けど紫苑はその歌に自身の気持ちを反映させて、周りに伝染させる。

嬉しい時は嬉しい気持ち、悲しい時は悲しい気持ち。

(これってすごい事だよな。なんせ相手の気持ちをコントロール出来るんだから。)

けれど、前の能力判定ではランクEだった。

紫苑はそれで納得してたようだったが、俺はあんまり納得いかなかった。

「じゃあ行くね。」

「おう、今日はランクDだせよ。」

「うん、がんばってくる！」

と言って走って行ってしまった。

（俺は理科室で能力説明だっけか。あゝダル。なんで理科室なんだよ。）

「えーつまり能力というのは・・・

（はあ、なんで小学校の時に教えてもらった内容やってんだよ。）

とりあえず説明すると、今から42年前、太平洋に謎の隕石が落ちてきて、なんかその隕石は特殊な波動を出しているらしく、その波動が人間の脳に影響を及ぼして能力が使える人達が現れだしたらしい。

まー隕石が落ちてきて世界中で津波が発生するのは地震が起こるは隕石の取り合いを始めるはで大変だったらしい。

今は、世界中のトップの学者が集まって隕石の研究をしている。

主に隕石の出す特殊な波動の解明や、その隕石が宇宙のどの場所から来たかなどを研究している。

けれど、危ない噂もあって・・・

なんでも、隕石によるアレ的な能力開発や、他にも何かを及ぼす影

響がないか人を使って実験してる、など色々な噂が飛び交っているらしい。

以上説明終わり。

「……い、……おい！大瀬良！聞いているのか！！」

「そんな耳元で怒鳴らないで下さいよ！」

「つたく、そんなんじゃ能力が身につかないぞ？」

「すいませーん」

（大体なんで体育教師のゴリ山ハ本名は森山だが、みんな裏ではこう呼んでいる）が能力の説明してんだよ！つーか別に能力欲しくねーし。）

しかも能力は生まれてすぐにに身につくので、あとから身につくのは稀だ。

結局俺は能力説明がダルだったので、保健室エスケープした。

俺は昼飯の時間まで保健室で寝ていた。

今は紫苑と秀司と一緒に学食でお昼を食べていた。

「れーん、お前なに授業サボってんだよぉ。」

「無能力の俺が聞いたって意味無いだろ?」

「そんなんじゃないや留年するぞ。ねえ紫苑ちゃん?」

「……」

なぜかポーっとしている紫苑。

「紫苑ちゃん?」

「……え?何?」

紫苑は全く聞いてなかったらしい。

「どうした紫苑?ポーっとして。」

「うつん!何でもないよ。」

「ならいいけど……」

(あれ？たしかランク発表は帰りのホームルームの時だからランクが低くて落ち込むとかは無いと思うけど?)

何で落ち込んでるんだろう?と考えていたら

「そういえば、紫苑ちゃんはその部活にやっぱり入るの?」

と秀司が紫苑に質問していた。

(そういや今は部活の仮入部期間だけ?)

「うん、秀司もでしょ?」

「そうだね」

「?、お前ら同じ部活に入るの?」

「そういやあ錬には言ってねーな。」

「私たち、特活部に入ろうと思って。」

「特活!?!」

特活部とは特別福祉活動部の略である。

特別と言うのは、部員は絶対に能力者でなければならぬからだ。主に能力を使った人助けをしている。

しかもそんな部活があるためか、この学校は能力者が多い。

「けど試験があつたんじゃねーの？」

試験があるのは生半可な人間を入れないためとかそんな理由だ。

「うん、だから今日の結果が出たからにしようと思って。」

「あがってるかもしれないしねえ。」

「あーなるほど。」

などと納得していた。

「そろそろ次の判定があるから行くね？」

「じゃあ、おれっちも行くわ。」

「おうがんばれよ二人とも。」

と言い別れた。

俺はその後、午後ぐらい真面目にやるかぁ、
と思いつつ午後の能力判定
を行い、体育館に向かった。

第五話 結果

(あーやっぱり出るんじゃないか。)

午後の能力判定に出たのだが、無能力者はどの系統なのかかわからないので全て行わされた。

(だいたい能力無い人の方が多いんだから、もう少し効率よくやれよ。)

いくらこの学校に能力者が多いと言っても一クラスに十人前後だ。

断然、無能力者の割合の方が多い。

そして当然のごとく俺は今回も結果なし。

つまり能力が何も起こらないから、無能力者というわけだ。

今はホームルームが終わって帰る準備をしているところだ。

「おい、れーんくーん結果どうだったあー。」

なんか秀司がウザイ喋り方しながら俺の肩に腕を乗せてきた。

「おいそのいちいち伸ばす言い方止めろ。イライラする。」

「おお！その調子だとまた結果なしですなあ。」

「だからなんだよ。」

「そんなツンツンすんなって。それより俺の結果気にならない？」

「ならない。」

「ええー！そこは気になるでしょう普通！？」

（いちいちめんどくさい奴だなー。はあ、聞いてやるか・・・）

「わかったわかった。気になります、結果はどうだったんですか？」

「よくぞ聞いてくれましたあー！なんと・・・ダダダダダダダダあ
」

（口でドラム音出すなよ。虚しくなるだろ・・・）

「ダン！なんとランクがCになりましたあー！！！」

「へ〜。」

「なにその反応！？もっと驚けろよー！」

「いやだって俺に関係な

バシン！

イギヤアー！！」

「なになに？何の話してるの？」

「おいだから人様の背中を叩くんじゃねーよ！」

俺は紫苑に叩かれた背中をさすりながら文句を言った。

「能力判定の結果だよお」

「無視すんな！」

「あゝ秀司、結果どうだったの？」

（もうスルーを通す気ですね・・・）

「聞いてよ紫苑ちゃん！なんとランクがCになったのです！！」

「すごーい！この学校でもCの人ってあんまりいないんだよね？」

「さすが紫苑ちゃんわかっていらっしやる　ところで紫苑ちゃんは

「どうだった？」

「私もランクDにあがったよー！」

「すごく嬉しそうにする紫苑。」

「しかも秀司と紫苑はハイタッチとかしてるし。」

「おおー良かったな、紫苑。」

「ありがとうー」

「なんでおれっちの時とリアクションが違うの!?!?」

（紫苑の前の判定が気に入らなかったからだ。）

「思っても口に出す気はないけどな。」

「これで今日の試験の自信ついたよー。」

「おれっちも受かる気がする!」

「そっぴや試験ってなにやんの?」

「気になったので聞いてみたら、紫苑が答えてくれた。」

「能力で合否を決めるんだって。」

（なるほど、たしかに「特別」だなそりゃ。）

「じゃあ俺は帰るわ。試験がんばれよ。」

「じゃあね、また明日。」

「じゃあな、ナンパすんなよ。」

「お前と一緒にすんな！」

そして俺が教室から出ようとした時

ピーンポーンパーンポーン

「一年二組大瀬良 錬さん、一年二組大瀬良 錬さん、至急第二会議室までお越しください。繰り返します。一年二組大瀬良 錬さん、
.....」

（なぜかスピーカーからよく知ってる名前が聞こえるのは気のせいだよな？うん気のせいだ。さて今日は買出しがあるから早く帰りますか。）

と思いながら帰ろうと教室を出たとき、誰かに肩を掴まれた。

「れーん、お前なにやらかしたあ？」

「知らん。俺は買出しがあるから帰る。」

「いやいや帰っちゃまずいだろい!？」

「呼び出されるような覚えは皆無だ。」

「でも現に呼び出されただろ、今……。」

「それは幻聴だ。大体第二会議室ってどこだ？」

「いやお前も聞こえたから幻聴じゃないだろ。」

などと逃げようとする俺を捕まえた秀司と言い争いをしていると紫苑が

「たしか第二会議室って特活部の部室だよな？」

と俺に無縁な部活の名前を出した。

「ならちよつと良いじゃん。鍊が逃げないように連れて行くつぜい。」

「

「それもそうだね。」

と言いつ張るお二方。

その時、俺は

(まてまて！本当に呼び出されることはしてないぞ！？しかもなん
で能力者の集まりの中に行かなきゃ行けないんだ？)

「ってゆうーか引つ張るな歩きずらいわ！」

「だってこうしないと錬は逃げちゃうもん。」

「そうそう、大人しく今は引つ張られとけえ。」

(くそー、考えがばれてやがる・・・)

仕方ない、このまま流れに身を任せるか。

と諦めながら、長く一緒の時間を過ごして考えがバレバレになって
しまう二人に引つ張られながら歩いていった。

(けど、どっかで聞いたことあったな。スピーカーの声・・・)

第六話 勧誘

「大瀬良 鍊君、特活部に入ってくれませんか？」

「は？」

(いやいや何をいきなり言い出すんだ!?)

とりあえず話がここまで来る経緯までさかのぼろう。

今俺は第二会議室と書かれた表札の扉の前に居る。

なぜそんな無縁な部屋にいるかは考えたくないの、現実逃避しておこう。

それでもって隣にいる二人、紫苑と秀司はすごく緊張した顔つきで扉を見ている。

(試験前の大抵の人だつて緊張するんだから無理も無いか。)

だが俺の場合は緊張よりもめんどくささの割合の方が大きかった。

(俺は何を怒られるんだろう？まだ何の問題も起こしてないのにな
〜。・・・は〜ついてねえ。)

「じゃあノックするね？」

と紫苑は言いノックをした。

コンコン

「どうぞ。」

中からさっきの放送と同じ声が出た。

「っし、失礼します！」

「しつれ〜します。」

どんだけ緊張してんだよ、と思いながら俺も部屋に入った。

部屋はとてもシンプルで右側には長方形の机がありその双方に長め

のソファがあった。

逆の左側はいくつかの仕事机のようなものがあり、そのひとつの机にの椅子に女性が座っていた。

（あれ？あの人どっかで見たような・・・あ！）

「今朝ケンカを止めに入った先輩！？」

「あら覚えてくれていたんですね」

（そりゃあ、頭の上に人が立っていたなんて衝撃的なこと忘れる方が難しいだろう。）

「錬、この人とお知り合い？」

「ああ、今朝のケンカ止めに入った人だ。」

「まあまあ、立ち話もあれですのであちらのソファに座ってください。」

とソファの方に歩いて行った。

「じゃあ遠慮なく。」

そして、俺、紫苑、秀司の順で座っていく。

「それで、あなた達二人は何の用かしら？」

「は、はい！私たち入部試験を受けたくて来ました！」

「入部試験を受けに？それは困ったわね。」

「どうしてなんですか！？ま、まさか私たちは受けられるランクじゃないとか……」

「いえ、そうゆう訳じゃなくて彼、大瀬君に話があるのよ。」

「そうだったんですか（は〜よかった）。」

「わかり難い言い方でごめんなさいね、試験は後で行うけれどそれで良いかしら。」

「全然良いです。秀司も良いよね？」

紫苑は秀司に尋ねるが、秀司はボーっとして聞いてない。

「秀司？ねえ秀司！」

「へ、何？」

「秀司も試験後で良いよね？」

「あ、ああ。」

(??、ボーっとしてどうしたんだ秀司?)

秀司がボーっとするのは、珍しいので少し驚く。

「それで大瀬君、話と言うのは・・・」

(やっぱり今朝のことだよな。)

「大瀬良 鍊君、特活部に入ってくれませんか？」

「は？」

以上で説明終わり。

「えーっと・・・はあ!..!」

(なるほどそうゆう事か、でもあの人何考えてんだ？俺をここに入れてどうしろって言うんだ？)

「その勧誘する理由はなんて？」

「それが『君たちと彼の為だ』としか教えてくれなくて？」

(俺の為？ますますわからねえ。)

「そういえば自己紹介がまだでしたね、私は月光 優那（うな）がっこうゆうな（うな）です。」

「私は黄川田 紫苑（むらさき）っています。よろしく願いします月光先輩。」

「俺は、まー自己紹介はしなくてもいいですね。でこっちは……
いまだボーっとしている秀司。」

「(秀司？おい秀司！ボーっとなすんな！)」

「……はーごめん何？」

「名前だよ、先輩に自己紹介しろ。」

「ぼ、『僕』は大宮 秀司といます。よ、よろしくお願いします。」

（僕う！？あいつどうした？熱でもあんのか！？）

秀司は周りの目を気にしないタイプなので誰であろうとあのフザケ
タ喋り方をする奴だ。

なのでいきなり『僕』なんて言葉を使うことなどない。

なので熱でもあるんじゃないかと普通に思ってしまう。

紫苑の方を見るとあいつも驚いて目を丸くしている。

（やべえ！今日、月でも落ちてくるんじゃないかねえの！？）

などと驚きを隠せない。

「どうです？特活部に入ってくれませんか？」

「へ？あ、ああそれは・・・明日でも良いですか？」

「はい構いませんよ。明日までに入部届け出せますから。」

（色々気になることがあるから確かめてこねえと・・・）

「では、黄川田さん、大宮君、これから入部試験をやりましょう。」

「はい！お願いします。」

「よ、よろしくお願い致します。」

（秀司の喋り方が怖いしキモイしメンドクセー！？）

「まずは、黄川田さんからで、音楽室に行きましょうか。」

「わかりました。」

「大瀬良君はどうしますか？」

「あ、俺はちょっと行くところあるので失礼していいですか？」

「どうぞ良いですよ。では明日の返事を期待しています。」

「じゃあ失礼しました。」

と秀司は一体どうしたんだろ？と思いつつその場を後にした。

第七話 理事長

今度は高級そうな扉の前にいる。

そして表札には「理事長室」と達筆な字で書かれている。

なぜ俺を選んだのか、それ知りたくてここまで来た。

コン、コン

誰もいない廊下にノックの音が響く。

「どござ。」

部屋の中から、威厳のありそうな男の声で返事が返ってきた。

「失礼します。」

そして俺は扉を開けて中に入った。

部屋の中はアニメなんかで出てくる部屋そのまま、全体的に落ち着いた雰囲気をもし出している。

「やはり君だったか。」

部屋の奥から先ほどと同じ声が聞こえた。

そこには、理事長としてはまだ若いだろう30歳ぐらいで、茶色の髪をオールバックにし、スーツを着た男が座っていた。

そして俺はこの人を知っている。

「お久しぶりです。仁くんさん」

「そんな他人みたいな言い方じゃなくて父と呼んでくれよ。」

「すみません、俺はまだ」信じていますから」・・・」

「・・・なら仕方ないね。」

俺にも秘密のいくつかはある。

そしてそれを知っているのはたぶん仁さんだけだ。

少しの沈黙の後、先に口を開いたのは仁さんだった。

「用件は、特活部のことかな？」

「はい、そうです。なぜ無能力者の俺を特活部に？」

「それは月光君が言わなかったかい？」

「あれだけじゃ納得いかないんです。もう少しちゃんとした理由を教えてください。」

いきなり『君たちと彼の為だ』と言われても納得する方が難しいだろう。

「それは君のほづがわかってるんじゃないかな？」

「??、言葉の意味がわかりません。」

「いずれわかるさ。で、用件は用件は他にあるかい？」

「い、いえ、これだけです。」

なにか追求しようとしたが、話を終えられてしまった。

(また今度聞けばいいか・・・)

「では失礼します。」

後ろを振り向き帰ろうとした俺に

「たまには、帰ってきてくれ。そうしたら「家族」も喜ぶから」

俺はその言葉を聞いた瞬間、泣きそうになった。

（「赤の他人」の俺のことを家族とまだ言ってくれるなんて）っと。
でも俺はそれをしちゃいけない、と同時に思った。

「すみません、俺は帰りません。．．ですがいつかは伺いたいと思います。」

俺はそういった後に、逃げるようにその場を後にした．．．。

s i l e n t

「『でもいつかは伺いたいと思います』．．．か。」

(彼も一人で背負い込む必要はないのに・・・)

「そして自分の「秘密」にも気づいていないか。」

彼には、大きな謎がある。

そして本人も気づかない。

「でもいつか君は大きな壁にあたる。その時にその「秘密」に気づくだろう。」

(後は君の選択次第だよ。 錬君・・・)

第八話 ドンマイ

(何故だ?)

ただいま私、大瀬良 錬は女の子と手を繋いでいます。

しかも美少女と言っても良いぐらいのかわいい子と。

心拍数だってヤバイ。

・・・なのに全く嬉しくない。

いや、言っとくけど俺は同性愛者じゃないぞ。

何故なら・・・

「「「待ちやがれコノヤロー!!」「「「

30人位の不良に追われているからだよ!

(こんな状況で嬉しくなれるかコンチクショー!)

何故このようなことになったかと言つと

「くそー、スーパーのセールの時間が終わってしまっ。急がなければ。」

スーパーのセールのために走る男子学生って珍しくね、などと思いつつ俺は走っていた。

(よし！ここは近道でもして行くか)

そして俺は裏路地に入ってしまった。

(この調子なら間に合いそうだな)

するとそこへ

「やめてくださいー！」

「いーじゃん。ちょっと俺たちと付き合ってくれよ。」

「！？、触らないでくださいー！」

「テメー口の利き方には気をつけるよ。」

(どんだけ今日は運が悪いんだよ俺。今日の俺の運勢は最悪でしたってかぁ。・・・しょうがない助けてやるか)

「おい、やめろよ。」

「うっせえなあ、邪魔すん・・・ああ！テメーは今朝の！」

「??？」

「ふざけんなよ！まさか人のナンパの邪魔しといて忘れたとあじやねーよな！」

「なんだ？知り合いなのか俺ら？」

（どっかで見たことある鼻ピーだよなあ？）

「なめやがってー・・・テメーら出て来い！」

すると、鼻ピーたちの後ろから何十人もぞろぞろと出てきた。

「ボコボコにしちまえ！」

「「「「うおー！」「「「「

（この人数相手はキツイな・・・女の子を連れて逃げるか）

「うりゃー！」

一人が木材で殴ってきた。

それを避けながら、顔面にカウンターをぶち込んだ。

そして女の子のところまで行きながら邪魔な奴らをぶちのめした。

そして女の子のところについて手を取り

「ほら、逃げるぞー！」

「は、はい！」

という訳だ。

みんな俺の苦労わかってくれたかな？

（それにしても、しつこい奴らだな。ホントこーゆー時に秀司の能力が羨ましいな）

「いたぞ！」

「ゲツ！」

先回りをされてしまった。

（くそ！はさまれた！）

「もう逃げられねーぞ。朝の分もまとめて借りを返してやるよ。」

そしてバットや木材やらをもった奴等が何人か突っ込んできた。

（女の子を庇いながらのこの人数はキツイ！）

そう考えてる間にも男がバットを振り下ろしてきた。

それを避け、相手の腹に膝蹴りをお見舞いする。

そして後ろから襲い掛かってきた男に、膝蹴りをいれた男を背中への肘うちを喰らわして突っ込ませた。

「うわっ！」

さらに、ぶつかった男たちに蹴りをお見舞いして後ろに吹っ飛ばした。

「このガキ！」

次は前から二人木材で襲い掛かってきた。

(この路地が、狭くて助かったな。)

振り回してきた木材をバックステップで避け

「グギャッ！」

自分たちの振り回した木材を喰らって倒れた。

(・・・後、相手がバカで助かった。)

「ハイそこまで！」

「ッ！」

後ろを見ると朝の三人組が女の子を捕まえていた。

(しまった！女の子を守るの忘れてた！)

「それ以上抵抗するとこの子痛い目にあっちゃうけど良いのかな？」

言いながら手のひらの半透明の球体を女の子の顔に近づけた。

「ひっ！」

「やめる！」

「じゃあ、おとなしくボコられるんだな。」

その隙に後ろから思い切り殴られた。

「ッッ！」

「やめて！」

女の子の声が響く。

しかし男は殴るのをやめない。

それでも俺は女の子を助け出す方法を考えていた。

(どうやってあの子を助ける？何か手は無いか？)

そしてさっき吹っ飛ばした奴の木材が落ちていたのをみつけた。

(これだ！)

すかさずそれを拾い能力を使っている奴のところにはぶん投げた。

「!?!」

能力を使っていた男の顔面にめり込み崩れ落ちた。

その際に女の子のもとへ行くのに邪魔な奴らを思い切り殴り飛ばして進んでいった。

「この野郎!」

鼻ピートの男は俺の方を睨んでくる。

その一瞬の油断の隙に

ガブツ!

女の子が男の手に噛み付いた。

「いつてえ!」

男は噛まれた痛さに女の子を突き飛ばした。

「きゃあっ!」

女の子はしりもちをつき

「このアマー!」

男が女の子にナイフを振り上げる。

そして振り下ろそうとした瞬間に

パシッ！

「はいそこまでー」

俺がナイフを持つ手の手首を掴んだ。

そして、手に力を込める。

「いだだだだだっ！！」

男がナイフを落とした。

俺はそのまま男の手を持ったまま男の後ろに回りこみ、男の手を背中あたりまで上げる。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！」

「おいお前ら動くなよー。動いたらこいつの腕へし折るからなー。」

他の不良に牽制を入れる。

リーダーの男が人質だからか不良はどうすればいいか分からず戸惑っている。

(さっきまでと立場が逆だな・・・)

と自重気味に心の中で呟いた。

「おいテメエら、こんなやつやつちまえ！数では勝ってるんだ！」
不良の一人が叫んだ。

「ふざけんな！リーダーの俺を見捨てるのか！」

「うるせえ、お前が勝手にリーダー面してただけだろうが！簡単に捕まるお前見たいなのはリーダーには向いてないんだよ！」

「な、なんだとっ！」

そして別の不良たちも

「そつだそつだ！」

「強くないくせに今まで偉そうにしやがって！」

「お前なんてリーダー失格だ！」

様々は罵倒を言い出し仲間割れを始めた。

（おいおいふざけんなよ・・・！この人数相手に女の子庇いながら戦えるか！）

「あのガキを殴り殺すぞーっ！」

「「「「おおーっ！！」「」「」

不良が一斉に襲い掛かって来た！

(せめてこの女の子だけでも・・・！)

そう思い、女の子の逃げ道を作ろうと思ったその時

ドカーーンッッ！！！！

後ろから爆発音が聞こえた。

第九話 意外な助け

爆発音がする方を振り返ると、地面に少し火が点いており壁などに焦げ目がついていた。

そしてその周りに不良たちが倒れていた。

少し焦げ目がついているだけで燃やされたというよりは爆発で吹き飛ばされた感じだ。

そして煙の向こうに人影が見えた。

「おいコラー、うちの学校の近くで問題を起こすな。」

と何ともやる気の無さそうな声も聞こえた。

(ん？この声どっかで聞いたような？)

そして煙が晴れた先に見えたのは・・・！？

ちっさい小学生ぐらいのフードを被った女の子だった・・・

（何か見覚えあるな）。思い出したくないけど。）

「あ！あなたは朝の時のくそ生意気な後輩!？」

（あ、何かイラツときた。）

いきなりくそ生意気なんて言われたら誰だってイラツとするだろう。

（まあ、ここは大人な俺が我慢しよう。うん）

「おい、俺たちにシカトぶっこいてんじゃねー!」

と不良の一人が爆発の驚きから我に帰ったのか、俺たちにキレかかってきた。

「チツ!」

舌打ちをすると先輩さんは能力を使い不良たちの近くの誰も居ない場所に使った。

ドカーン!!

すると不良たちは爆風で吹っ飛ばされた。
ついでに俺と女の子も・・・

「いちいちうっさいわねー、そんなに焦げすみになりたいの？」

なんて先輩が恐ろしいことを言うもんだから不良たちはなにも言えなくなつた。

「つーか危ねーなっ！俺たちまで吹き飛ばされたじゃねーか！」

「助けに来たのに文句言うな！大体先輩にタメ語を使うな！」

（だって先輩に見えねーんだもん・・・）

なんてやり取りをしている隙に

「うわー！」

「あんなのに勝てっこなねーよ！」

「おい、逃げるぞ!?!」

と言って不良たちが逃げ出してしまった。

「おい、待て！」

「放つといて大丈夫。あつちからは絶対に逃げられない。」

「なんでそんなこと言えるんだよっ!」

「またタメ語・・・！まあ今はいいや。」

と言って不良たちの逃げた方に歩いていく。

「どこ行くんだよ!？」

「んー、あの不良たちとっ捕まえてくる。」

「じゃあ俺も「あんたはその子の方をお願い。」

と言って先輩さんは女の子の方を見る。

「とりあえず安全なところまで連れてって。」

俺は少し迷ったが震えてる女の子を一人にする訳にもいかないので

「わかった。」

と言った。

「じゃあヨロシクー。」

と言って先輩さんは路地裏の奥の方へ進んでった。

それを見送った後

「じゃあ行くか？」

「は、はい・・・。」

その声はすごく震えていた。

(無理も無いか。さっきまでナイフ突きつけられてたしな。)

俺は安心させるために

「大丈夫、俺が守ってやるって。」

と言った。

(やばい！今の台詞メチャクチャ恥ずい！)

自分の言った台詞の恥ずかしさにもだえていると

「ヒック・・・！」

女の子が泣き出した。

そんな状況に慣れてない俺は

(なにになになに！え、どうした！？っーかどうすればいい！？?)

対処法が分からずあたふたしてた。

そして女の子は泣きながら

「あ、ありがとう・・・ごいします・・・！」

少し驚いた後、とりあえず俺は

「どういたしまして。」

すると女の子は安心したのか泣き顔のまま笑顔になった。

その顔があまりにも可愛くて、直視できなかつた。

（今、絶対顔が赤くなってるよな。俺。）

そして顔を赤くしたまま、女の子の手を引き路地裏から出た。

第十話 決断（前編）

裏路地から出たあとに、とりあえずさっきの先輩さんが出てくるのを待っていた。

女の子は近くの座れる場所を探し、座らせ落ち着かせていた。

（まさかこんな大事になるなんてなあ。）

ただナンパから女の子を助けただけなのに不良に追い回されるわ、殴られるわ、しまいには特活まで来るわで大騒ぎだ。

「あ……」

「ん？」

落ち着いたのか女の子が話しかけてきた。

「あ、あのーさっきは助けて下さってありがとうございます。」

と大袈裟に何度も頭を下げてきた。

「いや、そんなにしなくても良いですよ。」

「いえ、でも……」

「頭下げられるの好きじゃないんで。」

女の子は少し迷った後、頭を上げた

(頭下げられるのって謝らせてるみたいでイヤなんだよなあ。)

「でも本当にありがとうございました。」

再び頭を下げられた。

(もついいや……)

諦めたおれorz。

「じゃあもう大丈夫だね？」

「はい。」

「じゃあお先に失礼させてもらうよ。」

「はい……ってええっ！！」

驚く女の子。

「何ですか！？」

「おれ事情聴取って苦手だから、戻ってくる前に帰っちゃおうと思
つて。」

「そんな理由！？」

「まあ、そんな訳でお先に。」

と言って後ろを向き走って行く。

「せ、せめて名前だけでもっ！」

「大瀬良 錬って名前だ。じゃあなー！」

そして俺は走り去っていく。

あの後俺は買い物を通し、家に帰り飯や風呂を済ましてベッドで横になって今日のことを振り返っていた。

（朝寝坊し、不良のケンカして助けた少女へ能力者ぐとバトリ結果遅刻して、けど能力判定のおかげで助かっ

て、放課後特活に呼び出しくらい勧誘され、理事長に確認しに行き、帰りにまた不良とケンカして、美少女と

逃げ回り、特活に助けてもらい家に帰ってきた。）

すげえ一日だったなあっと思った。

（こんなにすごい毎日だったらいつか過労で倒れるな。）

そもそもつとも驚きなのは、無能力の俺が特活部に勧誘されたことだ。

最初は色々困惑したものの、俺の中では答えは決まっている。

俺の答えは『ノー』、だ。

いくら仁さんの頼みでも俺みたい無能力者が特活部に入部したら、他生徒からの文句は殺到するだろう。

そんなことで迷惑はかけたくないし、第一俺自身あんまり入りたくない。

たしかにそうゆう意気込みで入る奴は素晴らしいと思う、けど俺の場合はそんなに入りたいてって訳でもない。

そんな奴が入ったら試験に落ちた奴に失礼だと思う。

なので俺が入部を断ったらそれで済む話だ。

だから俺の答えは『ノー』、だ。

(大体何で俺なんだよ?)

仁さんの言ってることは漠然としすぎて良く分からなかった。

(まあ、断るんだからなんでもいっか、それよりも帰りに会った女

の子どつかで見たとあるような・・・)

思い出してみれば金髪のロングヘアを首の辺りで縛っており、目はカラーコンタクトだろう緑色の目をしていて、顔は綺麗なんだけどまだ幼さが残る美少女だった。

(せめて名前だけでも聞いとけば良かった。)

すこし後悔し、すぐにまあいいやと開き直り寝てしまった。

s i l e 月光 優那

「理事長は無能力者の彼を特活部に勧誘させたのかなぜ教えてくれないのですか？」

『今は言つべきときじゃないから、かな。』

電話先の威厳ある声の主はこの学校の理事長である

「わかりました。ではそのときがきたら襲えてくれるんですね？」

『もちろん。』

「そのときを心待ちにしています。それでは。」

と言い電話を切る。

あいかわらず彼を特活部に入れたい理由がわからない、と彼女は思った。

けれどハッキリしたことが一つ分かった。

いや、前々から思っていたが確信した。

(理事長は私に教える気が無い)

第十一話 決断（中編）

チュンチュン、チュンチュン

「ん〜、もう朝か・・・」

昨日と違い今日は寝坊はせず、普段どつりの起床ができた。

「ふああ〜、洗面所行くか。」

と寝ぼけ眼でベッドから出て、洗面所にトボトボ歩いていった。

ジャー〜、 水を出す音

バシャ、バシャ、バシャ、 顔を洗う音

フキフキ、 顔を拭く音

カラン、ニユル、 歯ブラシを取り歯磨き粉をつけた音

ゴシゴシ、ゴシゴシ、 歯を磨く音

ガラガラ〜、ペッ！ 口をゆすぐ音

キュツ、キュツ、 水を止める音

(朝飯どうするかな、・・・面倒だから昨日の残り物で良いや。)
と思いながら洗面所を出て、DKに朝食の準備をしに行った。

(いやー、良い天気だな)

学校に行く道を、のんきに歩いていく。

向かう先はまず紫苑の家、その次は秀司の家だ。

二人の家は都合よく俺が学校に行く道の途中にあり、紫苑の家は徒歩3分、秀司の家は徒歩8分だ。

ちなみに学校には徒歩15分で着く一番近い学校にした。

(っともう着いたか。やっぱいつ見てもでけえ家だな)

紫苑の家は合気道の名家なので昔風の大きな家に住んでいる。

そして家の隣には道場もあり、ここら辺では1、2を争うほど大きな土地だ。

とりあえず俺は門をくぐり、玄関のチャイムを押す。

ピンポーン

『どちら様ですか?』

と、チャイムのしたの音が出るアレから使用人の音が

「鍊ですけど、紫苑は?」

『ああ、鍊君ですね。少々お待ちください。』

軽く俺失礼だけど、どっちも慣れてるから特に問題は無い。

ガラッ

「いつてきまーす!」

紫苑が玄関から紫苑が出てきた。

「おはよー。」

「おはよつす。」

「ハハ、今日は寝坊しなかつたんだね。」

「そう何度も寝坊なんかするかよ。」

「それもそつか。」

「じゃあ、学校に行くついでに秀司の家に行くか。」

しばらく歩くと秀司の家に着いた。

秀司の家は……まあ普通だ。

(紫苑の家を見た後だからそう思うんだろっけどな)

俺はチャイムを押す。

チャツチャラー

(相変わらず面白いチャイム音だな・・・)

そう思っていると家の中から

「ちょっと待っててくれえー！」

と言う声がした。大方髪型や服装のチェックでもしているのだろう。

このときの秀司は長いので先に行くのが俺と紫苑の方針だったりする。

「先に行くか。」

「そうだねー。」

俺と紫苑は秀司を置いて行って、今通学路を通っている。

「それにしても何であいつはあんなに身なりをきにするのかね。」

「うーん・・・今時の男の子も皆こうなんじゃないかな?」

「俺にはわからん。」

「錬は気にしなさ過ぎなんじゃないの?」

「失敬なっ。しっかり歯磨きや洗顔はやっているぞ。」

「そんなの常識だよ・・・」

と紫苑は苦笑いをした。

(今時の野郎共は皆そんなもんなのかな?)

と考えにふけっっていると

「おーい！」

秀司の声がした。

「な、なんで置いて行くんだよおっ。」

肩で息をしながら聞いてきた。

「お前（秀司）が遅いから悪い（悪いんだよ）。」「

俺と紫苑でハモツて返答した。

「そ、そうだけど少しくらい待ってたって良いじゃん・・・」

「待つている時間が無駄だ（勿体無い）から」「

またもや俺と紫苑でハモツて返答した。

「そ、そこまで言うか？」「

「だって事実だから。」

そんな他愛もないことを話しつつ学校に登校した。

三人とも同じクラスなので教室へそのまま直行し、ホームルームが始まるまで話していた。

するとチャイムがなって担任が入ってきてホームルームが始まり、その次に退屈な授業も始まった。

俺は基本的に授業は、寝てるか後ろの席の秀司と話してりして終わる。

紫苑は意外と真面目なのでしっかりと授業を受けている。

そして今日もその流れは変わらない。

そのまま午前中の授業が終わり昼休みに。

昼休みになると半分の生徒が購買や食堂に行くので割りと教室は空く。

そして俺たちはいつもどおり、

俺と秀司の近くの席に紫苑が座り食事を摂る。

紫苑は来て早々

「二人とも今日も真面目に授業受けてなかったでしょー!」

と怒られてしまった。

「だってめんどいしい。」

「眠くなる。」

「そんなんだとテストで赤点とって夏休み補習になるよっ。」

そんなことでビビることがない俺たち。

「勉強は出来るから大丈夫」

「お前たちにテスト前に教えてもらっから問題ない。」

なんたつて紫苑は優等生だし、秀司は勉強出来るからテスト前に教えてもらえば何とかなるのだ。

そんなことを言う俺たちを見て紫苑は肩をすくめてため息をついて

「もう、いつか。」

と言い弁当を食べ始めた。俺と秀司も自分の分の弁当を食べ始めた。

いつも通り弁当を食べながら話す。

(そういえば・・・)

「そういやお前ら昨日の試験どうだった？」

聞いてはいけなかったのか、二人は急にうつむきだした。

「ふ、二人とも落ちたのか？」

すると秀司は首を横に振った。

「おれっちは受かったけど紫苑ちゃんが・・・」

「そ、そうか・・・」

三人の中に沈黙が訪れる。こんな時に気の利いた言葉が言えない自分が情けない。

（えーっと！、えーっと！）

「そ、そういえばなんで二人は特活部に入ろうと思ったんだ？」

なんとか場の空気を変えたい俺。

「おれっちは自分の力試しになるし、紫苑ちゃんも入るって言っから・・・」

「し、紫苑は？・・・」

「私は、自分の力が少しでも人の役に立つなら良いなって思っ入ろうと思ったの・・・。せっかく人の役に立てる力があるなら、

それで誰かを支えたりしたかった……。」

その時俺は紫苑の人を思いやる気持ちの強さに驚いたが、それよりも怒りの方が強かった。

こんな人の為を思っている奴を落とした特活部と、何も出来ない自分への怒り。

「錬はどつするの?。」

「何が?。」

「特活部に勧誘されてたよね。入るの?。」

入らない。つと素直に言えなかった。落ちた奴の目の前でそんなことを言いたくなかった。

言い換えれば、行きたかった高校に落ちた人の前でその高校からの勧誘を断るようなものだ。

そんなことを俺は出来なかった。だから

「まだ考え中。」

としか言えなかった。すると紫苑は

「無理しなくて良いよ。」

「!？」

俺の気遣いなんて紫苑にはばれていた。紫苑をさらにつらくさせてしまった。

「無理なんてしてねーよ。」

としか言い返せなかった。紫苑はそれを聞くと少し苦笑いをした。

本当に自分は情けないと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1109z/>

Happening Days

2011年12月4日02時49分発行